

WINDS CAFE 306 in 原宿 @カーサ・モーツァルト

川島素晴 plays... vol.4.1 “100均グッズでジョン・ケージ”

2022年6月26日(日) 14時

(川島よりご挨拶)

川村さんとの出会いは、1992年のケージ・イヤーのときに遡る。「レコード芸術」誌面でその膨大なケージ・コレクションを披瀝なさった記事を拝見し、大学2年生だった私にとっての憧れの存在となった。そして翌1993年、川村さんの企画する様々なイベントに参加して面識を得て、1995年の水戸芸術館での塩見允枝子さんのイベント「時の迷宮のJOHNCAGE」で出演者としてご一緒した。

それ以来、私のコンサートにもしばしばいらして頂いているし、WINDS CAFEで何度か作品を上演して頂く機会もあった。しかしながら、実はWINDS CAFEの企画を担当するのは、これが初である。しかも本来、6月は私が企画担当ではなく、私は出演者として参加するだけのはずだった。その代打としてではあるが、はからずも、(初の企画担当だというのに)6月、7月の回を連続で担当することになったのである。

ケージ没年にお名前を認識してから30年、再びケージ・イヤーで濃い邂逅という、まさにケージに引き合わされるかのような関係なのである。

7月24日の内容は、従来よりケージの中でも比較的上演機会の少ない大きな2作品を上演することを計画している(詳細は6月26日の本番後に公開)。私としては、ケージ・イヤーである今年の企画であり、且つ他にもない川村さんの依頼である以上、7月のみならず6月もオール・ケージ・プログラムにしようと考えたが、さすがに大がかりなものを急に仕立てるのは難しい。そこで、完全なソロ・パフォーマンスにすることにした。

しかも、4月に自ら主催したリサイタルで、100均グッズのみによるコンサートを開いたところであり、自宅に夥しい数の100均グッズが転がっている。これを使わない手はない。ということで、4月のリサイタルのスピノフ企画として、オール・ケージを100均グッズ縛りで上演する、という内容を考えた。

一見、容易くプログラミングできそうなものだが、意外とケージのソロ演目で100均グッズ縛りで上演可能なものは少なく、恐らく今回上演するものがほぼ全てとなるはず。「全てを受け容れる」姿勢、正装を嫌いという場でもジーンズで通したケージであれば、こうした企画を喜んでくれるのではなかろうか……。

## ・ Variations I & II & III (1958/61/63)

透明シートに印刷された図形を（落下のような偶然的な方法によって）ランダムに配置することによって演奏内容を決定するという、不確定性を極めた時期の作品シリーズ。「I」は、数多くの図形楽譜を用いた《ピアノと管弦楽のためのコンサート》(1958) と同時期に書かれ、そのピアノパート用の膨大な図形楽譜の中の一つを翻案したものと言える。与えられた複数の線と、複数の点が印刷されたシートを任意にずらして配置し、その結果の点と線の距離を計測し、そこから音の5つのパラメーターを導く。

「II」は、「I」と似た、線と点の関係を計測する方式ではあるものの、ここでは、線と点それぞれがバラバラに印刷された透明シートを用いて、全てを一斉に投じて得られる図形をもとに計測を行うため、演奏内容は完全に不確定となる。「III」は、42の円が印刷されたシートが封入されており、これを42枚の小さな円にカットして、ランダムに配置し、その様子から行為（演奏とは限らない）を導く。

WINDS CAFÉ の今年のシリーズ中、中川俊郎さんもこの3曲を同時演奏したようだが、100均グッズ縛りであること、また図形による偶然的な結果に基づくものであることから全く異なる内容になると思われるため、(できればシリーズの中で同じ演目が被らないようにしたかったが) 上演することとした。

## ・ 27'10.554" for a percussionist (1962)

この時期のページには、こういった、極めて細かい演奏時間を題名にした一連の作品がある。どれも「紙のしみ」に基づく図形楽譜であり、スコアは線と点が並ぶ。打楽器奏者のための本作は、金属、木、皮膜、その他の4種の線があり、それらの強と点の距離は強弱を示す。1秒の隙間に膨大な点が表示されている箇所もあれば、1ページ(1分間)に2つしか点が無いページもある。それぞれのカテゴリでの楽器選択や演奏方法は自由で、むしろその変化への様々な工夫が求められており、100均グッズ縛りでの上演はなかなか難しい。とりわけ皮膜楽器(いわゆる太鼓類)は限界があるため、100均ショップで購入した紙を膜として使用した太鼓を用いることとした。

## ・ Song Books より (1970)

1970年に作曲された《Song Books》は、《Solo for Voice》と題された(No.3からNo.92までの)90曲に及ぶ膨大な曲集となっており、初期の作品のような数音のみしか用いないシンプルな旋律のものから、図形的な不確定性の音楽、あるいは既存音楽をチャンス・オペレーションによって解体する書法等、それまでの声のための様々な書法の集大成になっている。しかも、《Solo for Voice》と銘打たれているにもかかわらず、声を用いるとは限らない、アクションの指示や、映像の指示等も含まれている。以前、「無音」をテーマとしたリサイタルでは、「無音」になるアクションの指示しかない作品を幾つか上演した。本日はこれらの中から、次のような、100均グッズ縛りで上演可能なもののみを上演する。

《Solo for Voice No.36, 38》指定された数(ここでは3)だけ飲食を行う。

《Solo for Voice No.46》何か食べ物を準備する。

《Solo for Voice No.89》座席表の上に、直線を伴う透明板2枚を落として交わる点の観客に、リンゴかクランベリーを渡す。誰もいなければそこに置く。

## ・ Child of Tree (1975)

実はケージは、即興演奏を避けていた。演奏者の手癖が色濃く反映してしまう即興は、ケージの目指す「自然」ではないからだ。しかし、演奏するマテリアルがもし、手癖のないものであればどうか。例えば、法螺貝に水を入れ、それを回すことによって出る音は、回すという行為はあるものの、そのとき実際にどのようなタイミングで発音するかは制御できない。(場合によっては鳴らないで終わってしまう。)

こうした素材であれば、即興であっても、手癖は反映しない。《Child of Tree》は、そのような可能性を探る一連の即興を許容した作品のうちの一つで、私はしばしばこの作品のアンサンブル版である《Branches》を取り上げてきたが、ソロ版である《Child of Tree》は初である。ここでは、10種類の植物を任意に選び、易経を用いて8分間の演奏時間をどのように分割するか、また、それぞれの時間枠でどの楽器を演奏するかを決定する、ということが指示されているのみで、実際にどのような音を奏でるかは任意である。この作品の上演体験は、その準備期間の生活が一変するという稀有な体験となる。路上その他、あらゆる植物に接する際に、その音を想像してしまうのだ。

今回は100均グッズ縛りということで、100均ショップの中に見出せる植物を物色するという、これまたマニアックな作業を強いられた。なお、スコアには、大きな豆を乾燥することで得られる楽器の使用が指定されており、それだけは100均ショップには存在しなかったため、止むを得ず指定通りのものを使用している。もう一つ、サボテンも指示されている。これまでの機会では、大きな金鯪という、トゲがとても硬くてよく鳴る種類を準備して上演してきたが、今回は、100均ショップに並ぶとても小さなサボテンを使うことにした。これはこれで、今回のような小さな会場での上演であれば、良い音がする。

## ・ 龍安寺 [100均グッズ独演版] (1985)

ケージ自身による「龍安寺」のイメージから描かれたドローイング作品があり、それを裁断して得られる曲線をスコアに配置することで構成されたスコア。したがって、その演奏は全部ポルタメントになる。

声や、オーボエ、フルート、コントラバスなど様々な版があるが、中でもトロンボーン版は、超低音のとても狭い音域のみが指示されており、そうした音域でポルタメントしかないため、ほとんどいびきのような音響結果になるという、超個性的な作品となっている。4分音符と4分休符の配列のみによる打楽器(2種の発音原理のものを同時に叩く)オブリガートと一緒に演奏する(必ずしもなくてもよい)ことが通例で、そうした淡々とパルスが響く様は日本の獅子おどしを彷彿とし、緩やかなポルタメントの音響と相俟って表題となった「龍安寺」が妙にマッチするという、日本人好みの仕立てとなっており、とりわけ日本ではケージの後年の作品中最も上演機会に恵まれている作品である。

昨年私は、法螺貝によるリサイタルにおいて、この作品の曲線部分を法螺貝で吹き、同時に法螺貝を2種のバチで叩くことで打楽器部分を同時演奏するという「独演版」を実行した。今回は100均グッズ縛りということで、100円のトランペット(実際はフリーリードの楽器)を吹き、100円の2個の物体を同時に叩くということを行う。100円トランペットは通常、単音楽器である。しかし4月の100均グッズのリサイタルに際してスキルがあがり、様々な音程を出せるようになったため、トロンボーン版をそのまま5オクターヴ上げた状態で演奏する。

## ・ ONE<sup>7</sup> (1992)

ケージの作品の中で 100 均グッズのみで演奏できるソロ作品を並べて、しかも年代順に配列した本日のコンサート、最後の作品は、ケージが晩年に取り組んだ、いわゆる「ナンバーピース」というシリーズの中の 1 曲である。編成の数が題名となり、右上の指数はその人数の曲の何番目か、を意味する題名で、ONE ならソロだし、FIVE なら 5 重奏、《108》という管弦楽作品まである。これらは共通して、全てがパート譜になっていて、「タイムブラケット」という手法で表示されている。これは、各段の開始が何分何秒からか、終了が何分何秒までか、ということが規定され、演奏の中身は明確に記譜されている。しかし、開始と終了のタイムには幅がもたされており、上演のたびに異なる結果となる。このような緩やかな不確定性は、ケージが求めた「自然」に、最も近いあり方だったのだろう。かつてコイン投げでとても時間がかかった易经もプログラムを用いてスムーズに実行され、こうした作品が最晩年に多数作曲された。

本作は、本シリーズ前回に上演された《FOUR<sup>6</sup>》の中の 1 パートを上演する際は《ONE<sup>7</sup>》になるとされているもので、そういった意味では内容が被るのだが、これまた全く異なる内容になると思い選曲した。12 種類の「(強弱や音色などが) 固定された音」を選択し、その番号のみが記譜されているタイムブラケットによるスコアで、12 個のうち 1 番と 10 番は（恐らく易经の結果出現しなかったために）登場しないので、実質的には 10 種類を用いる。

# ！！次回予告！！

WINDS CAFE 307 in 原宿 @カーサ・モーツァルト  
CAGE IN ～上演機会僅少なジョン・ケージ作品二題～  
2022 年 7 月 24 日 (日) 14 時

《SPEECH 1955》(1955/約 45 分)

\*5 人のラジオ奏者とスピーチによる作品。なるべく 1955 年当時のラジオを用いて演奏します。

《アルプが「皺くちやの紙」や「破れた紙」のシリーズを制作するために行った、紙をくしゃくしゃにする音や破る音はどうでしょうか。彼は水（海、湖、川などの流水）や森からインスピレーションを得ていたのです。》(1985/約 40 分)

\*3 人から 10 人までの演奏が可能で、4 月のリサイタルでは 3 人版を上演しました。

今回は 10 人版で上演、世界的にも 10 人での演奏はなかなか希少価値ではないかと思われます。

<出演>

小栗舞花 金田望 川島素晴 豊谷紗帆 灰街令 山田奈直

Deniz Akbulut Renan Fontes Bento Stephan Elliot Perez Veronika Reutz Drobnic